

# 筑波大学日本文学会会報

第19号

1995年2月

韓国映画「風の丘を越えて」

越えて・西便制 犬井善壽

日本文学会だより 一

研究室だより 三

卒業生だより 五

日本文学会教官学生名簿 九

十二

## 韓国映画「風の丘を越えて・西便制」

犬 井 善 壽

この夏、韓国映画「風の丘を越えて・西便制」を見た。これには感動した。

この映画は、私が韓国滞在中に封切りになった。慶北大学校の李淙煥君（文芸言語研究科研究生を経て中央大学で学んだ）が百済の旧都扶余や新羅の古都慶州を案内してくれた時に、車中で私に熱っぽくその粗筋を聞かせてくれて、是非とも見るよう勧めてくれたが、帰国して字幕スーパード付きのものが出たら必ず見ると約束するしかなかった。漢陽大学校の院生も誘ってくれたが、言葉が分らないからと、その招待を辞退した。公使の小川郷太郎氏の招待で金榮哲君（現在、外国人研究者として筑波大学で西鶴小説の研究を進めている）と一緒に日本料理をご馳走になった席でも、「西便制」のことが話題になった。

帰国してちょうど一年、その「西便制」を、東京で見た。そして、韓国滞在中にこの映画を見なかったことを後悔した。それほどこの映画に感動したのである。

トンホという青年が、父ユボンに姉として育てられパンソリの歌い手になったソソファを探してまわる。青年は父にパンソリの伴奏の太鼓を教えられたが、父のパンソリに対する深い思いが理解できず、逃げ出していたのである。その姉は、心痛で声が出なくなる程

の訓練を養父に強いられた。養父は漢方薬でソnfアを失明させて芸に専心させた。片田舎の居酒屋でその姉を見つけた弟は、名乗らず、姉にパンソリを歌うように頼む。姉は太鼓の音で直ぐ弟と知るが、名乗らず、歌い続ける。明くる朝、弟はその地を去る。世話になっていた居酒屋の主人と別れた姉は、小さい女の子に引かれて、旅回りに出る。

姉弟の愛情物語と言ってしまうのは簡単である。しかし、これは、「恨（ハン）」という韓国の人々の心の底に等しく流れる心情の物語である、と李滄煥君は教えてくれた。

話が素晴らしいの言うまでもない。日本の伝統芸能を考える上で、教えられるところが多い映画である。パンソリというのは、李朝時代に盛んであった唄い物である。我が国の浪曲や浄瑠璃と共通性が大きい。私の関心事の平曲とも、当然のことながら、共通点がある。幼い姉弟が父に「珍道アリラン」の歌い方を鍛えられる場面や父自身が昔の仲間にパンソリを教わる場面では、我が国の語り物の継承の在り方との共通点を見た。また、ソnfアが小さい女の子に引かれて雪の中を旅に出るラストシーンでは、斎藤真一氏の絵や映画「離れ警女おりん」で知られる、越後の警女さんたちの語り物のことを思い出した。

韓国滞在中、各地を見学した。李君や金君、韓国外国語大学の崔忠熙君（文芸言語研究科出身）・翰林大学の徐楨完君（文芸言語研究科出身）や大邱専門学校の河泰厚君（教育研究科研究生出身）など、筑波大学で学んだ人たちが時間を割いて案内してくれた。一人で出かけたのが、瑞草の韓国伝統芸能センターである。毎週土曜日、小ホールで韓国伝統芸能の公演があり、何度も鑑賞した。パンソリ・民謡・宮廷音楽、絃楽器・管楽器・打楽器、唄・踊り、と様々な芸能に触れることができた。蚕室のノリマダンの屋外円形劇場でも、土曜日に、民族芸能が行われていた。見物の人々が芸人さんと一緒に踊り出す光景に、芸能の原点を見た。ロッテワールド民族館は出口近くの小さな舞台だけは無料でもぐり込めることもあって、買い物ついでに、たびたび民謡などを聞きに入った。大学構内でクラブ活動として農楽の練習をしている学生に、楽器を叩かせてもらったりもした。

このように、私はいろいろな所でいろいろな韓国の民族芸能にふれたが、その私の心をとらえたのがパンソリであった。言葉は分らないが、長い話を口誦し、耳で享受する、語り物としてのパンソリが私の興味を引きつけたのである。パンソリのCDを何枚も買い込んだ。「春香歌」「沈清歌」「水宮歌」などである。同じ曲を複数買った。「春香歌」だけでも三十余本の異本が伝わりと聞いて、『平家物語』と同じだと思ったからである。

秋に、李滄煥君への便りに「西便制を見ました」と書き添えたところ、旬日を経ず、李君から『西便制映画物語』という分厚い本が届いた。一時帰国した金榮哲君が、奥さんからの御土産だといって、韓国の民族芸能のCDを届けてくれた。「韓国の言葉を勉強して、パソソリを研究するといいね」とは、私と一緒に映画「西便制」を見た娘の言葉である。